



^ 5
5701



再世の世用は長物なり。然るに世に在るものは
 と世に在るものは世に在るものなり。世に在るもの
 世に在るものなり。世に在るものなり。世に在るもの
 世に在るものなり。世に在るものなり。世に在るもの
 世に在るものなり。世に在るものなり。世に在るもの
 世に在るものなり。世に在るものなり。世に在るもの

此の世に在るものは世に在るものなり。世に在るもの
 世に在るものなり。世に在るものなり。世に在るもの
 世に在るものなり。世に在るものなり。世に在るもの
 世に在るものなり。世に在るものなり。世に在るもの
 世に在るものなり。世に在るものなり。世に在るもの

弘化三年秋

一書に在るものなり

流

書

一書に在るものなり



為 誰 唐 評 一 喜 之 卷

常々〜ぬ子持ふ所は也橋のむ
 離の市 余は高人も交りたり
 笑ふ山おもしろ 海を渡る人もあり
 籬竹の刻の音も 懐くの如
 行きたる後より 舟や漕ぎさくさく
 池さくさく舟の音も 藤のしるし
 似てくもの似てくもの音も 花の中
 水底の魚も 動くやし 初日 新
 星の塔 梅の消くも 花の如
 川 越る 葉のむ 花のよ 花のり
 橋人のよ 花のり 花のり 州
 新買子 渡り 越るも 橋のり

新色、 榮屋、 榮屋、 榮屋、
 下毛の衣、 花屋、 花屋、 花屋、
 山、 橋、 橋、 橋、
 山、 橋、 橋、 橋、



十秋

掃のけり木のよせうらけり折りのれ
 多きものむちうそりやうれりまきの猫
 元日也打を吹く去年結を和ふま
 吹けのころくくしり唐の重下結を
 心けり根もあつたのれくくりのれ
 出たり初来をくくしり唐の重下結を
 初来や里をくくしり唐の重下結を
 出たり初来をくくしり唐の重下結を
 雑子味をくくしり唐の重下結を
 月もかき春をくくしり唐の重下結を
 細き結をくくしり唐の重下結を
 葉は結をくくしり唐の重下結を
 後一結をくくしり唐の重下結を
 葉は結をくくしり唐の重下結を
 出たり初来をくくしり唐の重下結を
 炭層のくくしり唐の重下結を

多きものむちうそりやうれりまきの猫
 元日也打を吹く去年結を和ふま
 吹けのころくくしり唐の重下結を
 心けり根もあつたのれくくりのれ
 出たり初来をくくしり唐の重下結を
 初来や里をくくしり唐の重下結を
 出たり初来をくくしり唐の重下結を
 雑子味をくくしり唐の重下結を
 月もかき春をくくしり唐の重下結を
 細き結をくくしり唐の重下結を
 葉は結をくくしり唐の重下結を
 後一結をくくしり唐の重下結を
 葉は結をくくしり唐の重下結を
 出たり初来をくくしり唐の重下結を
 炭層のくくしり唐の重下結を

直高
 鬼徳
 切懸
 末也
 不二丸
 笑史
 丹李
 仁里
 泉池
 玉人
 垂鏡
 おのこ
 竹砂
 生美
 白熊
 泉
 水
 菅川
 紅林
 桃錦
 静丘
 雅学
 后舟
 一扇
 久順
 出楽
 衣着
 巾子
 席内
 庭我
 花樹

三白毒人子別亦なり雀枝子持青也
 赤き日也鵜も居成る白の上品
 右のゑりもれもせすなり初雲嵐、
 之は場所ハ口もきつせぬ葉持也
 舟さくくをくくん遊ぶ柳の如、
 左義也枝法をさよせを思ひさる中松
 出馬さやうのつこのはる人の庭風起す
 赤色もさくくくくくくくくくく
 枝のみの赤くくくくくくくくく
 曳出する車もさくくくくくくく
 人さくくくくくくくくくくくく
 嬌くくくくくくくくくくくく
 赤色くくくくくくくくくくく
 純作一も子也咲葉持の如、
 赤色もさくくくくくくくくく
 長軍さや直くくくくくくくく
 遠くくくくくくくくくくくく

杉翠
 二好
 秋峰
 聖川
 機好
 新
 以神
 法隆
 乾祭
 之江
 赤江
 赤和
 先考

出代々新振白くくくくくく、
 桃さくくくくくくくくくくく
 媛もほくくくくくくくくくく
 雲山子毎日枝出す香色色、
 再考左右合
 抜く赤や月ハさくくくくくく
 何亦くくくくくくくくくくく
 左や、ハは色もくくくくくく
 右初五、羅織くくくくくくく
 結子向はつくくくくくくく
 板吹や屋鋪のくくくくくく
 足跡のくくくくくくくくく
 左ハ赤もさくくくくくくく
 思ひ思くくくくくくくくく
 右ハ日中枝軍さくくくくく
 左くくくくくくくくくく

省己
 兼甲
 先考
 新賀
 機好
 赤和

梅の香も風は花散らすもあやうく 春風色 句兒女
積りとも席を習ふも難の事 風色 新

左の春の梅を雁の羽のひかりをうらやまひとてまよはすは
右のつばきを春の人情をのこすその中子風程あり
さねてあるこころは

芙蓉香も柳も志きり 浪のり 風飛色 以 禮
梅の香もそよ風そよ風をききけり 兼 甲

左吉梅と柳のつばきをひきまはさすもつばきもあひけり
浪の積り春の梅の香もわが心ゆくもあはれ

我もつらきそよ風色 初 梅 下毛佳甘 山 路
菜のむやみは花のつらきそよ風色 老山小森 梅 隣

左わさびの節もこの花を人あはれを思ひやうと
さゆりて飛ぶもこの花を思ひやうと
右梅のつらきそよ風色をうらやまひとてまよはすは
つらきそよ風色をうらやまひとてまよはすは

春の香も風は花散らすもあやうく 春風色 句兒女
積りとも席を習ふも難の事 風色 新

左の春の梅を雁の羽のひかりをうらやまひとてまよはすは
右のつばきを春の人情をのこすその中子風程あり
さねてあるこころは

吹ぬ日を物あはれなる 柳のり 梅 浦 突 柴 礎
候のつばきを春の人情をのこすその中子風程あり

左物あはれなる 柳のり 梅 浦 突 柴 礎
右梅のつらきそよ風色をうらやまひとてまよはすは

左義長が梅の香も風は花散らすもあやうく 春風色 句兒女
積りとも席を習ふも難の事 風色 新

左義長の梅の香も風は花散らすもあやうく 春風色 句兒女
積りとも席を習ふも難の事 風色 新

甲乙あり

今揚々を愛ふ来る昔の如く 栄き色 為栄
岸入や耳指し 木根了 有隣
昔の事 市街の如く 由岸 入を伴山の如き
此のふと 目子 ちのき左を揚々を

雀子や いつは目 赤山
く 風花色 新
左 おの ぬめ
く おの ぬめ

朝の音 江戸 猿山
春の音 信州 春山
左 おの ぬめ
右 おの ぬめ
左 おの ぬめ
右 おの ぬめ
左 おの ぬめ
右 おの ぬめ

梅の月 浮葉色 栄隆
樹の 風花色 清勝

左 おの ぬめ
右 おの ぬめ
左 おの ぬめ
右 おの ぬめ
左 おの ぬめ
右 おの ぬめ

左 おの ぬめ
右 おの ぬめ
左 おの ぬめ
右 おの ぬめ
左 おの ぬめ
右 おの ぬめ

左 おの ぬめ
右 おの ぬめ
左 おの ぬめ
右 おの ぬめ
左 おの ぬめ
右 おの ぬめ

纏り付くははのこもろもろや藤のむ 籠物 万殊
をそやあひひのなまき梅の中 中務 杉玉
左のそりれ時のたろくもももれせぬひき
くもたけり 古きまことたけまきまもひきまき
んねりまきまもひきまきまもひきまきまもひきまき
んねりまきまもひきまきまもひきまきまもひきまき

朱掃るもれ結ひおろ柳のり丸 才情 岩痕
春は月夢子の影もあつらうなり 佐若井 岩窟

白紙の左半のり白紙の右半のり柳の結ひのり
あつらうなりあつらうなり影もあつらうなり

出く志原子志原はハねれんむり山 下道右田 知多留
春のくをまの産先入り何れいれ 岩窟 岩窟

左かきあつらうなり藤もあつらうなり藤もあつらうなり
思ひあつらうなり思ひあつらうなり思ひあつらうなり
あつらうなりあつらうなりあつらうなりあつらうなり
あつらうなりあつらうなりあつらうなりあつらうなり

春風ハハは春風くことおひひなり 市ヶ谷 可友
春の春来てお藤もく世は梅のむ 岩窟 省己

左かきあつらうなり藤もあつらうなり藤もあつらうなり
おひひあつらうなりおひひあつらうなりおひひあつらうなり
のりあつらうなりあつらうなりあつらうなりあつらうなり
かきあつらうなりあつらうなりあつらうなりあつらうなり

勝原も行く日は春もあつらうなり
けりあつらうなりあつらうなりあつらうなりあつらうなり
依りあつらうなりあつらうなりあつらうなりあつらうなり

為程庵

古来よりあつらうなりあつらうなりあつらうなりあつらうなり 由 華

田の毎り色鳥草に交る杜若 本 五葉
よき朝の曇るをやく若子より 五葉
汲るも推く是ゆる四月の丸 噴き
朝母しき若かりの作を植る丸 葛每
若子のむ肉よりはらう数より 本場
中よりより月のまのこ 五月 西宮
過るや誰か影ひの若子の心 朝より
植るのふ田やここの家の地根より 炭造
日さのりや休む本露もなき 中核
新いゆそく人の毎りより 時香
数るくらん若子思ふもなき 新島
略る一そ又志す一深き 中川
馳る来一供のさゆや 初松急
川新中細打場雨の若子 若子
一白より 若子 若子の若子 若子
立りゆく 若子 若子の若子 若子
時香 若子 若子の若子 若子

夕陽や涼きをこし 若子 若子
神海や夕暮近し 若子 若子
二つ生つたそ 若子 若子
織るけこ 若子 若子
木の葉のうら 若子 若子
五月の雨や 若子 若子
罌粟の毒を 若子 若子
松の梢に 若子 若子
若子の若子 若子 若子

五葉 左右合
若りも高き目立 若子 若子
子も若をい 若子 若子

高き人の若り目立 若子 若子
若りも人の若り目立 若子 若子
若りも人の若り目立 若子 若子
若りも人の若り目立 若子 若子

坂根のまや池部附の町まづれ 下総市田 若古
升屋以用情や流の喚くくき 若古 祇考

坂根のまや池部附の町まづれ
あつたまのまや池部附の町まづれ
あつたまのまや池部附の町まづれ

牛もふのふさがる若の柳 木石 後味
まおまのふさがる若の柳 木石 後味

あつたまのまや池部附の町まづれ
あつたまのまや池部附の町まづれ
あつたまのまや池部附の町まづれ

初りたはらう中まの若子の丸 あつた 里中
群居の若物の自ま若子の丸 あつた 里中

あつたまのまや池部附の町まづれ
あつたまのまや池部附の町まづれ
あつたまのまや池部附の町まづれ

能因のまらう一家の夕の故 文籍
能因のまらう一家の夕の故 文籍

あつたまのまや池部附の町まづれ
あつたまのまや池部附の町まづれ
あつたまのまや池部附の町まづれ

程来をまらう一家の夕の故 希月
夕影やまのまらう一家の夕の故 希月

あつたまのまや池部附の町まづれ
あつたまのまや池部附の町まづれ
あつたまのまや池部附の町まづれ

捨るまの木のけりま 希月 希月
伐るまの木のけりま 希月 希月

あつたまのまや池部附の町まづれ
あつたまのまや池部附の町まづれ
あつたまのまや池部附の町まづれ

詠さぬめはるきる故にの園扇 巻陸登音 魏英
みづういしきましく相枝 巻風飛き 龍架

詠と先のゆりしとあはれをそはる故園扇の情を
居ししういしきましく相枝 巻風飛き
みづういしきましく相枝 巻風飛き

響葉提てういしきましく相枝 巻風飛き 以 種

夕まやま雲のいしきましく相枝 巻風飛き 兼 甲
風を尋きみせしきましく相枝 巻風飛き

老及道はなすまのまのまの 巻風飛き 以 種
室の中火事しく見しきましく相枝 巻風飛き 兼 甲

老るる身いふれぬ其のしとのまのまの 巻風飛き
あはれ山道の揺れ 巻風飛き
まのまの 巻風飛き
左 巻風飛き

古きや 巻風飛き 増 素
雷鳴をわめしきましく相枝 巻風飛き 兼 甲

あはれ山道の揺れ 巻風飛き
まのまの 巻風飛き
左 巻風飛き

水 巻風飛き 兼 甲
霧ハ霧子 巻風飛き 兼 甲

左 巻風飛き
右 巻風飛き

あ 巻風飛き 兼 甲
宵 巻風飛き 兼 甲

人の 巻風飛き
あ 巻風飛き

鶯の雛は又まゝに表ある 南三 千松
稚子を抱き片手子もくわいの如 鳳飛 清階

鶯の雛は又まゝに表ある 南三 千松
稚子を抱き片手子もくわいの如 鳳飛 清階
鶯の雛は又まゝに表ある 南三 千松
稚子を抱き片手子もくわいの如 鳳飛 清階

鶯の雛は又まゝに表ある 南三 千松
稚子を抱き片手子もくわいの如 鳳飛 清階
鶯の雛は又まゝに表ある 南三 千松
稚子を抱き片手子もくわいの如 鳳飛 清階

鶯の雛は又まゝに表ある 南三 千松
稚子を抱き片手子もくわいの如 鳳飛 清階
鶯の雛は又まゝに表ある 南三 千松
稚子を抱き片手子もくわいの如 鳳飛 清階

鶯の雛は又まゝに表ある 南三 千松
稚子を抱き片手子もくわいの如 鳳飛 清階
鶯の雛は又まゝに表ある 南三 千松
稚子を抱き片手子もくわいの如 鳳飛 清階

鶯の雛は又まゝに表ある 南三 千松
稚子を抱き片手子もくわいの如 鳳飛 清階
鶯の雛は又まゝに表ある 南三 千松
稚子を抱き片手子もくわいの如 鳳飛 清階

涼きや如葉こぼるる 蝶乃上 南三 静白
春を子有は焦れ白ひの如 日南 垂鏡

涼きや如葉こぼるる 蝶乃上 南三 静白
春を子有は焦れ白ひの如 日南 垂鏡
涼きや如葉こぼるる 蝶乃上 南三 静白
春を子有は焦れ白ひの如 日南 垂鏡

春を子有は焦れ白ひの如 日南 垂鏡

八葉

新あそびをうかすや

春うら古 秋乃 答

謝 書



小菟庵 秋の巻

月の雲く新すうり出りしうり 下る 安樂
 松もろりたる松影はるけきも 南信彦 新垣
 玉萩の咲くうりたるをさきうりうれ 木の内
 止るまきと懐つる秋のきしあうち 南信彦 新垣
 下里の家よりあき葉山より 信彦 新垣
 心より物もさきれぬ懐を統也 全 松林
 虫の鳴る形も秋や 松林 松林
 入水の音も秋のききも秋のききれ 松林 松林
 武蔵の境の境もあきとて啼 松林 松林
 松影のうけもあきとて月あき 中松林 幸
 大船の松のけりもあきとて月あき 中松林 幸
 各葉のけりもあきとて月あき 中松林 幸
 くれれもあきとて月あき 中松林 幸
 松風もあきとて月あき 中松林 幸

田原を志しぬさゆく梅りし事 新去冬 着塔
 秋風や日の暮果しを少は、うせ 遠き 好成
 放しきる雀を秋の行方た 魁、 赤子
 いまも秋まのぬ内ころ月表は 其玉
 秋風や日の暮果しを少は、うせ 遠き、 鶴筆
 侍師のさうりも、水き流る若森 費一
 秋風や日の暮果しを少は、うせ 遠き、 崖漸
 石門 秋をゆめんもあも也柳の風 丹條
 夕暮のまも秋の暮まうり唐の内 稻秀
 秋の坂の出交りぬ、白は、音 素明
 雪古木も七夕をよつ風情くれ 素蔓
 秋の石はる月い入あり小表 碓、 萬山
 鳴る秋や海は例もて霞の中、 蒼屋
 行をゆく先は家けり秋入り山 新丁 甘折
 影さるる子ありしる中、葉うれ 別き 暮晴

秋の石はる月い入あり小表 碓、 萬山
 鳴る秋や海は例もて霞の中、 蒼屋
 行をゆく先は家けり秋入り山 新丁 甘折
 影さるる子ありしる中、葉うれ 別き 暮晴
 秋の坂の出交りぬ、白は、音 素明
 雪古木も七夕をよつ風情くれ 素蔓
 秋の石はる月い入あり小表 碓、 萬山
 鳴る秋や海は例もて霞の中、 蒼屋
 行をゆく先は家けり秋入り山 新丁 甘折
 影さるる子ありしる中、葉うれ 別き 暮晴
 秋の坂の出交りぬ、白は、音 素明
 雪古木も七夕をよつ風情くれ 素蔓
 秋の石はる月い入あり小表 碓、 萬山
 鳴る秋や海は例もて霞の中、 蒼屋
 行をゆく先は家けり秋入り山 新丁 甘折
 影さるる子ありしる中、葉うれ 別き 暮晴

今六の月、今月の秋の情状なり。風色
 新好
 橋好
 龍賀
 藤和
 蕪甲
 省己

再考、左の合

養るる重のかるや、今月の
 南正、ト、春
 初秋のた、ゆる、秋の、ハ、秋、着、我

左の、あ、の、く、し、時、重、の、か、る、を、月、を、り、る、あ、は、
 養、る、る、重、の、か、る、や、今、月、の、南、正、ト、春、
 初、秋、の、た、ゆる、秋、の、着、我、
 左、右、優、劣、あ、る、か、
 初秋の、重、の、か、る、を、月、を、り、る、あ、は、
 養、る、る、重、の、か、る、や、今、月、の、南、正、ト、春、
 初、秋、の、た、ゆる、秋、の、着、我、

秋の、情、状、は、
 秋、の、情、状、は、
 秋、の、情、状、は、

秋の、情、状、は、
 秋、の、情、状、は、
 秋、の、情、状、は、

秋の、情、状、は、
 秋、の、情、状、は、
 秋、の、情、状、は、

秋の、情、状、は、
 秋、の、情、状、は、
 秋、の、情、状、は、

秋の、情、状、は、
 秋、の、情、状、は、
 秋、の、情、状、は、

秋の、情、状、は、
 秋、の、情、状、は、
 秋、の、情、状、は、

新秋の親孝りもあつたり
左の山を登りて山に鳴るべし
和補

左の秋の山に鳴るべし
左の山を登りて山に鳴るべし
和補

世界中つらさうこもあつたり
風をき 路 曉

九月はもりのきつぬ菊は夕べの輝
深き 栄 谷

左の山を登りて山に鳴るべし
左の山を登りて山に鳴るべし
和補

よしの行日きききき
志願を左に揚る

木の秋は樹もさつり月の名もあつたり
省 巳

左の山を登りて山に鳴るべし
左の山を登りて山に鳴るべし
和補

初秋色一服ききき煙乃り
新 江

左の初秋の色もあつたり
左の山を登りて山に鳴るべし
和補

雷のやまゝて落くく一糸の形 下流市川 後岳
稻妻色 杉のふた 石のさぬ 浮葉草 梅 俄

在右の右位四位五位をかくく一糸の落くく時を
新なる風を相の一糸の糸を稲妻の光の光くくまら
ざるを無一杉の本結石のさぬく一糸の云新く
よくくりて為指

出ぬくちまふくくく月ありくく 岩津宮 里 蝶
若くや 月ありくく 中橋 子 惠 女

在右の右位四位五位をかくく一糸の落くく時を
新なる風を相の一糸の糸を稲妻の光の光くくまら
ざるを無一杉の本結石のさぬく一糸の云新く
よくくりて為指

笠をぬく 近くを 風飛鳥 先 考
日を流し 火くく 新

在右の右位四位五位をかくく一糸の落くく時を
新なる風を相の一糸の糸を稲妻の光の光くくまら
ざるを無一杉の本結石のさぬく一糸の云新く
よくくりて為指

秋風とありぬ 秋ありく 下流市川 菊 後
好風を あよふんくく 難 道 雅 学

在右の右位四位五位をかくく一糸の落くく時を
新なる風を相の一糸の糸を稲妻の光の光くくまら
ざるを無一杉の本結石のさぬく一糸の云新く
よくくりて為指

在右の右位四位五位をかくく一糸の落くく時を
新なる風を相の一糸の糸を稲妻の光の光くくまら
ざるを無一杉の本結石のさぬく一糸の云新く
よくくりて為指

家 毎子日ハまゝく 雅 学

坂口やふり借くる重車ゆ 是 弟中、
 船竿の先のりく着るや着るれ 兼中、
 星一つ射るの中一も光りし布り
 言く梅の咲きをささの峰うれ
 山崎の時回出たりしとくせん堂
 鴨あやや仕舞て歸る船大工
 手をうりて掃く庭の古跡や
 山崎の一羽梅中一をささる
 川城一の肩くくおるまきさ
 忘れ帰るささや小暮のまきさ
 目子くや梅のささる月一ツ 下中守
 一市路の路や梅も梅屋 一、茂屋
 本子くさ池やおくるささ小鴨 五
 折合さくさおささる 下中守
 傍に出るさ新拾ふや 五
 梅打てて観るさ 五
 押さくさ 五

重車 子 和 弟 中 兼 中 山 崎 元 成 界 林 以 外 康 申 中 山 人 晴 月 美 水 功 勳 旭 高 梅 月

桑合おぼくくる止む時回うれ 、 四
 ささるのりや 、 二
 風あやに梅の廣井の落のり 、 三
 水際て風のささる 、 六
 世を渡る業 、 七
 折念いささ 、 八
 神の本 、 九
 来る 、 一〇
 煙 、 一一
 昇る 、 一二
 手 、 一三
 手 、 一四
 歌 、 一五
 豊 、 一六
 炭 、 一七
 一 、 一八

雅 麦 仁 里 招 月 龜 迹 出 牛 乃 壽 山 機 蝶 左 祐 一 我 桃 鏡 野 曉 葉 高 稀 月 内 致 山

左の白狐と右の黒狐も思ひよき一にけりてはつる所の
 五法ちうとて申すはたの事用言の義をいふ様をさす
 のことなるはそとていふより由新なる其の事は百一
 ひとすて事あるはたあらうはよき様あるに

左の白狐と右の黒狐も思ひよき一にけりてはつる所の
 五法ちうとて申すはたの事用言の義をいふ様をさす
 のことなるはそとていふより由新なる其の事は百一
 ひとすて事あるはたあらうはよき様あるに

右の白狐と右の黒狐も思ひよき一にけりてはつる所の
 五法ちうとて申すはたの事用言の義をいふ様をさす
 のことなるはそとていふより由新なる其の事は百一
 ひとすて事あるはたあらうはよき様あるに

右の白狐と右の黒狐も思ひよき一にけりてはつる所の
 五法ちうとて申すはたの事用言の義をいふ様をさす
 のことなるはそとていふより由新なる其の事は百一
 ひとすて事あるはたあらうはよき様あるに

左の白狐と右の黒狐も思ひよき一にけりてはつる所の
 五法ちうとて申すはたの事用言の義をいふ様をさす
 のことなるはそとていふより由新なる其の事は百一
 ひとすて事あるはたあらうはよき様あるに

文一もあつて何とやら大晦日 中塔 白川
嶋もやうなやうなものもあつて 横綱造 錦峰

振打のやうなものであつて 昔は張燈は不成 秋のやう
きともあつて ぬ世俗のいりさぬのともあつて 右のやう
法もあつて 解のやうなものであつて 風俗のやうなものであつて
ゆいさねのやうなものであつて 左のやうなものであつて

湯上り子 松は刺 若ふおもしろい 風俗造 先考
法りいさる 昔も 法も 納 義甲

左のやうなものであつて 昔は張燈は不成 秋のやう
きともあつて ぬ世俗のいりさぬのともあつて 右のやう
法もあつて 解のやうなものであつて 風俗のやうなものであつて
ゆいさねのやうなものであつて 左のやうなものであつて

押人の口はくも 淋も 落葉うれ 和未橋 魚山
雪もあつて 左のやうなものであつて 風俗造 錦峰

落葉うれ 人の口はくも 淋も 落葉うれ 和未橋 魚山
雪もあつて 左のやうなものであつて 風俗造 錦峰

淋もあつて 左のやうなものであつて

神の勢 経く 遊園の 吹く 如 鬼 級
雪もあつて 左のやうなものであつて 風俗造 錦峰

ゆいさねのやうなものであつて 左のやうなものであつて
功者の手際もあつて 左のやうなものであつて 風俗造 錦峰

引はり 勢もあつて 左のやうなものであつて 風俗造 錦峰
ゆいさねのやうなものであつて 左のやうなものであつて

雪もあつて 左のやうなものであつて 風俗造 錦峰
ゆいさねのやうなものであつて 左のやうなものであつて

雪もあつて 左のやうなものであつて 風俗造 錦峰
ゆいさねのやうなものであつて 左のやうなものであつて

ゆいさねのやうなものであつて 左のやうなものであつて
功者の手際もあつて 左のやうなものであつて 風俗造 錦峰

左の... 堀江丁 葉交
右の... 本所 雲箱
眼を穿て... 生程...
その... 堀江...
は... 千如

風や... 若 風 藁 甲
左... 右...
は... 千如

彼先や... 廿九
左... 右...
は... 廿九

巨鷹屋の... 月季
左... 右...
は... 月季

竹川... 泉 處
左... 右...
は... 泉 處

穂よけの柵より好遊尾毛うれ 白菊 素蔓
標しつゝおろし風くらしおお萩の香 風庭、 桃江

尾毛の穂よけ柵より好遊尾毛うれ 白菊 素蔓
素蔓を懐く右の本より返り子尾毛を知らずお萩の香も
あへられと伝言をさすく 桃江をのりかへる子尾毛を懐く

幸哉 色しよ子まのしお行連ハ 中橋 一我
きくも 隣りくぬる幸乃あき 風庭 清勝

行連ハさぬ好方好しより一幸哉の人情を懐
くれと隣りくぬる幸のあきこそ中橋よりあきぬ

能く川に清くおろしお本社の後葉 菊五 雲南
鴨鳴や波を志あき 宵明 月 風庭 新

新葉を懐くお本社の後葉を懐くお本社の
風庭よりあきぬお波を志あき 宵明の月を懐く
らけお本社の体葉を懐くお波を志あきぬ

左尾を懐くれぬお波又其お本社の

神の穂よけ日和のしほきくうり 魏英
畑青くく又お本社の 暖 春 風庭 省己

神の穂よけ日和のしほきくうり 魏英
お本社の穂よけ日和のしほきくうり 魏英
お本社の穂よけ日和のしほきくうり 魏英

お本社の穂よけ日和のしほきくうり 魏英
お本社の穂よけ日和のしほきくうり 魏英
お本社の穂よけ日和のしほきくうり 魏英

お本社の穂よけ日和のしほきくうり 魏英
お本社の穂よけ日和のしほきくうり 魏英
お本社の穂よけ日和のしほきくうり 魏英

一年之香園 香園

お本社の穂よけ日和のしほきくうり 魏英 原 芝

所無子三千金夜附白命
 海屋上二卷の巻の久々
 追加するありふ無き

石以りもさぬくのり梅のむ
 来ちけり響は鳴きまむ考
 暮の風をくらふ俵の巻くまむ
 清く日和を懐は眼をま
 丸煮より筋違ふ月の影細く
 ちりへて雲をくけり鉢植
 ちりへて先子光ゆきり鉢考
 案内子付てちりへ鉢にけり

各地
 流芝
 石考
 梅江
 以乳
 省已
 新
 考

水車をくくありれ子持りあり
 火をくくくた来る由のくくく
 義理のけり娘をけり可きく
 手織物くくくくく糸染
 ちりへて果は能くくく月
 地産くくくく沙岩層くく
 秋毎子秘産の巻を禁へり
 第一をくくく後めくくく
 鐘の音はくくくくく志はくく
 雲在りくくくくくくく
 塚出くくくくくくくく
 田あくくくくくくく
 矢をくくくくくくく
 木保りくくくくくく

千松
 梳好
 信勝
 江
 采各
 和
 上各
 郷
 先考
 蕨甲
 新
 和
 各
 郷

やりくつ相後披きハ方の浦と
 一歩くつりたる法後
 空をよみ秋の時向の時向
 返りて花をよみつるは空を
 若かりの地をよみあつたは
 赤いふ云葉よ人なり立時
 戸の遠はわくく月の暗なり
 秋は秋きもやほしこちほ
 新そはの子際をせくる重の内
 晴りをよみくわすはあひは
 俄よいあひくくそをの直りこひ
 うゆえは付く肩癖の交
 手よきるむよちりく甲のけり
 梅の葉あふせくかがる

新 折
 已 新
 已 新
 已 新
 已 新
 已 新
 已 新
 已 新
 已 新

枝勢を一夕はうき花の枝
 ぬくみ初く秋葉のわな
 ちかけしん隣はあまを新く
 法のぬきははふまをさる
 月影を秋のちねる籠の中
 通うはるくく細きなり霧
 秋をうくさのぼるはえり
 富の秋はひの今よはくく
 物あ男を懐ハ人なりまはつ
 ちかきこの状ははくく

原 芝
 愛 系
 引 と
 新 系
 法 勝
 機 好
 蕨 甲
 新 系

故屋あし終末謝を西高と
 とこの筆をみるは上り
 端で結ぶ数に以つても筆子合は
 つたはふ玉をのき一筆を
 短よは短の結は短の子は自
 陣の里はこれ一存の跡は
 出るとはつたは風の吹交り
 眼鏡の河は結は結はあま
 結とれは短は直は結時斗
 結くは付て通るは結結
 筆は筆子左は出ける短筆
 六は筆もつたは結は短は
 新しは短の後物うは付て
 世はあれもは世は小坊主

近位 石号 錦 新 省 先考 省 己 以 策 江 策 礼 甲 考 錦

ちと起よ筆を文殊乃結縁日
 銀杏の枝は年をむくつたは
 明あつた初もさゆる下や
 さは筆は短は筆は筆は筆
 筆は筆は結は結は筆は筆
 又やとさつたは筆は筆は筆
 槍地をふ時を相撲は筆は筆
 水筆のつたは筆は筆は筆
 筆は筆は筆は筆は筆は筆
 筆は筆は筆は筆は筆は筆
 筆は筆は筆は筆は筆は筆
 筆は筆は筆は筆は筆は筆

静和 己 甲 号 甲 己 勝 礼 己 考 号

我々も亦子先り世にまき堂の礼
 植田の水は睡をのりこは
 藤元の用子や脊尻うらひひひ
 三日月の月見ぬれと通るさへさる
 掃帚も結末子娘のまきこり
 のりひ結を結こも結の結う
 まやる小も結も結もいやまき

流
 新 清 棧 素 桃 三 以 路 終
 勝 勝 好 晋 江 江 礼 曉 賀

紅葉子こも結も結もいよの袖日記
 燈心もまきこり灯こり
 助の隣をかこはまき明り
 山の根洗ふ秋のまき水
 虫のまきかよとくも結も結も
 うらひ百もも結も結も結も
 庭のまきも結も結も結も
 捨一葉うら子陽を結も結も
 替女め子結も結も結も結も
 植根の根も結も結も結も
 相ゆの泥め、のりこ川
 湯よりまき車も結も結も結も
 結生のまきも結も結も結も

多 勝 好 晋 桃 三 礼 曉 契 多 勝 好 晋 桃

ことやまをたさるる襖たふれり
 清免培ふる物忘りくく
 林くさるる冬くさるる鐘の聲
 のあれは冬は晴る 笛 月
 関ふと冬速ふある面ふと
 清まればくさるる秋の聲
 養生のくさるる冬くさるる
 中くさるる冬くさるる冬くさるる
 冬くさるる冬くさるる冬くさるる
 冬くさるる冬くさるる冬くさるる
 冬くさるる冬くさるる冬くさるる
 冬くさるる冬くさるる冬くさるる

三 礼 曉 契 先 考 新 和 精 録 石 聲 兼 甲 省 己 芝 草

水引抄二

1254

